

書籍紹介

# 「奇跡の経済教室」

## 基礎知識編・戦略編

中野 剛志 著  
KKベストセラーズ



筆者のことは昔から知っている。物怖じしない熱血漢で、舌鋒の鋭さは時に「口が悪い」との印象を与えることもあったようだ。ただ、その口の悪さを言われても苦にしない自若さがあり、「いつの世も正しいことをいう奴は評判が悪いものさ」と嘯（うけながす）いている風であった。

彼は、政治思想、政治哲学の勉強をして、その論文を英国の論壇で高く評価されて博士号をも得ているアカデミアである。しかし、元々経済官庁の職員であるだけに、論理を背景にしつつも弁舌の向かうところは至って実体的な経済だし、着眼は地に足がついている。時に、話題の政策事項について当局の公式的立場と異なる見解を披露して、所属庁から「おいおい、それはないだろう」と窘（とがめ）られるような場合もあったようだが、反面「そういう見方もあるよな」という読者ファンも少なくないと聞いた。

そんな著者が、これまでの舌鋒・筆致を少しだけ控えて、ずぶの素人にもわかるような鄭重さで、現下の我が国経済問題の分析と処方箋を書き下ろしたのが表題の2冊である。「主流の経済解釈」とは違うから世間に異論があるだろうし、その正邪を即断することはできない。しかし、「経済教室」と銘打つだけあって、読みやすいし論旨も分かりやすい。少なくとも、経済書にありがちな理論と実態を別に論じるといふゴマカシがないし、展開に筋が通っている。だから、仮に主張が異なる人をして、「(好き嫌いは別にして)一つの立論・見解だなあ」と思わせるものがある。

世の通説と異なることを唱え、言挙げするには勇気がいるし、面倒なもの。ことさらに波風を立てることをしないことを以て常識人という向きがあるのも事実。しかし、「何となく皆がモヤモヤしていることを解きほぐす」ことの効用は大きいし、激動の世にあっては、常識と非常識との境目、通説と新説との佇まいは流動的。あとは受け手として読者がどうするかである。著者はそうした意味で「民度への挑戦」をしている気がする。

読んでいて、とりわけ面白いと思ったのは、平和憲法と財政法の財政規律規定とが繋がっている(!)などの話題もさることながら、「自己実現的予言」、「認識共同体」などという経済学書ではなじみの薄い概念が、論旨展開に応用され、妙に説得力を発揮していることである。いずれも、社会心理学的、哲学的な所以（ゆえん）を新しい説明手段にしているのが新鮮である。最近、ビジネス界のメジャープレイヤー、例えばジョージ・ソロス、カーリー・フィオリーナ（ヒューレッド・パッカー）などのバックグラウンドが哲学専攻の大学時代にあったことが注目されているが、この本の著者の上記アカデミア遍歴とも相通じるものを感じる。

「戦略編」の方の本の帯に「経済学者、官僚たちが“こっそり”読んでいる」とあるが、その真否は知らない。しかし、そうかもしれないと思わせるところのある本である。

評者 細野 哲弘